

韓国南東部都市のまちづくりと社会遺産を活かしたまちづくり

重村力・曾我部昌史・鄭一止

1) はじめに

本研究は2018年3月9日金曜日～3月12日月曜日に行われた神奈川大学アジア研究センターの曾我部・重村・鄭による、韓国南東部都市のまちづくり調査およびその後の資料整理分析による研究をまとめたものである。両都市の都市構造の変化および町並み／歴史的施設等社会遺産の保全活用と新規開発の建築群による町並み形成および社会の活性化に着目した。

対象区域は大邱市旧市街および昌原市昌原地区馬山地区鎮海地区である。本研究は大邱市においては権上九（グォン・サング）氏および馬山地区鎮海地区においては許正道（ホ・ジョンド）博士の指導・案内・資料提供に負うところが大きい。ここに記して両博士に大きな謝意を表したい。

大邱市は古代から存在する都市であり、現代においておおいに発展した韓国有数の大都市である。ことに朝鮮戦争1950～53における都市破壊を免れた大都市として、都市構造の骨格を維持しながら、日本統治時代を含む近代の建築群が残っている貴重な都市でもある。ここでは王朝時代の骨格が残る城内に残る日本統治時代の建築社会遺産と現代的まちづくりの関係について明らかにする。

昌原市は三つの異なる歴史的背景を持つ都市群の連合体である。中世に都護府として栄えた拠点でありながら、さびれていた地区に、1970年代工業拠点として新都市が開発された昌原地区、歴史的な良港が近代の開国とともに1899年から開港地として発展した馬山地区、古代からの港湾が1904年日本海軍の軍港都市となり発展した鎮海地区の三つの地区の都市構造の発展変貌とまちづくりについて明らかにする。なお「2）大邱市の社会遺産を活かしたまちづくり」は曾我部・鄭が、「3）昌原市の都市構造の形成と社会遺産を活かすまちづくり」は重村が執筆を担当した。



2) 大邱市の社会遺産を活かしたまちづくり

1 大邱（大邱広域市）

大邱は人口約 246 万人（2016 年*1）を有する、ソウル、釜山、仁川について韓国第四の都市である。

慶尚北道の道庁所在地で、朝鮮半島東南部内陸の盆地にある。大邱国際空港、韓国高速鉄道（KTX）東大邱駅などを有し、高速道路網でも韓国各地と接続する。慶北大学をはじめとした教育機関も多く、繊維産業などでも知られ、2008 年には「大邱慶北経済自由区域」の指定を受け、グローバル知識創造型経済自由区域を目指している（*2）。

*1 : <http://kosis.kr/eng/> *2 : <http://www.dgfez.go.kr/jpn/>



図1 大邱市観光ガイドマップ（大邱市発行）より抜粋

2 歴史的背景

古代からの長い歴史を有する都市だが、今日の大邱の街並みを検討する上で、日本統治時代における地域開発の状況と、朝鮮戦争時代の防衛ラインについて確認をしておきたい。

1910年～1945年の日本統治時代に先立ち、1905年に大邱駅が開業し、1907年からは城壁を解体し街路化する工事が行われていた。日本統治時代に入り、文化統治期にあたる1920年頃から1930年頃の期間を中心に大邱駅にも近い北側の城壁跡である北城路周辺などで都市化が進み、日本式家屋も数多く建てられた（図2）。図3の1930年代の大邱のまちなかの風景は、近代的ビル、伝統町家、看板建築が隣接して混在し、同時代の福岡など西日本都市の景観と類似している。日本式家屋をモダニズム風に変えた看板建築が多く見られる。1950年に勃発した朝鮮戦争では同年9月中旬ごろに防衛線が最も南下したが、その際にも大邱市内が直接の攻撃を受けることはなかった。戦災が無かったことが、歴史的建築物が数多く残されている背景の一つとなっていると考えられる。大邱は、ソウルや釜山など大都市の中でも唯一といっていいほど、かつての建築的名残を多く残す都市であり、朝鮮時代、日本統治時代、戦後と重層的な時代の複合的景観をもっている。

香村文化館

<http://hyangchon.jung.daegu.kr/jpn/>

近代歴史館

<http://artcenter.daegu.go.kr/dmhm/en/content.html?md=0234>

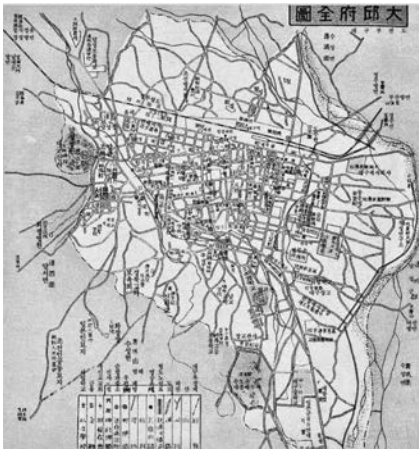


図2 1930年大邱府全図

<http://blog.daum.net/jpurplish/604131>



図3 1930年代大邱の風景

http://www.djdrfc.or.kr/gallery01_1.htm?no=13&page=1&pre=&mod=view

3 北城路（プクソンノ）

北城路： 今回は主に北城路工具通りとその周辺を視察した。北城路は元々城壁だったところを街路化してつくられた主要道路の一部である。日本統治時代には元町と呼ばれた繁華街となり、三中井百貨店など多くの店舗が集積し賑わった。第二次世界大戦後は、米軍基地からの流出物資（機械、工具、金物など）を扱う店舗へと転換し、ものづくりで知られる地域となった。それらの産業も最近では衰退しつ



北城路。敷石により城壁跡であることが示されている①



長屋の改修によるカフェ「北城路ミックスカフェ」。「北城路」という通り名をもじった店名②



日本統治時代に建てられたもので、最も古い建物。バルコニーが内部化されている③



李陸史文学館。外壁が鉄板。新たな解釈による改修④



裏に入ると安宿である旅人宿も少ない⑤



日本家屋の特徴を消す、あるいは商業的な目的から印象を変えるために外壁を新設し、看板建築化している。

図4 北城路周辺。現在の様子

つあり、空き家も増えている。多くは日本式家屋であり、後述の北城路工具博物館をきっかけに始められたリノベーションによるまちづくり事業により、特徴的な風情をもったエリアとして生まれ変わりつつある。

香村洞（ヒャンチョンドン）： 北城路の南側は香村洞と呼ばれるエリアである。中心となる西城路 14 街は、日本統治時代に村上町と呼ばれていた。靴屋の集積する通りとして知られているが、上述の北城路でのリノベーションによるまちづくりの対象地区内であり、事例も増えつつある。1960 年に建てられた近代建築である靴工房兼倉庫を改修して作られた「大邱ハル」もリノベーション事業の一環として外観の設えや内部空間の改造が行われた。



大邱ハル外観。ブックカフェ兼日本人ビジターセンター⑦



大邱ハル内部。防空壕だった一段下がった場が特徴的⑧



リノベ事業による他事例。架構を組み直している⑨



モダンなデザインの改修⑩



事業対象外だが、リノベーションした事例⑪

図 5 香村洞周辺。現在の様子

慶尚監營路（キョンサンガムヨンロ）：さらに南は、慶尚監營公園（元慶尚北道官庁跡）、大邱近代歴史館（元朝鮮殖産銀行大邱支店）のほか警察署や小学校が集まるエリアがある。日本式家屋の改修でできた従軍慰安婦歴史館、日本式家屋と韓屋を一体的に改修して作られたパンゲストハウスなどがある。



従軍慰安婦歴史館⑫



パンゲストハウス⑬

図 6 慶尚監營路周辺。現在の様子

北城路工具博物館

概要：北城路でのリノベーションによるまちづくりの先駆けとなったのが北城路工具博物館である。1936年に米屋の倉庫として建てられた日本式家屋で、真壁造りの木造2階建瓦葺きだった。その後の日帝残滓清算運動に連動した改修で、看板建築的に切妻屋根は隠され、真壁造りだった外壁にはモルタルによる外皮が取り付けられていた。また、时期的な前後関係は不明だが、西側に道路が新設されたことにより建物の外形が変更されている。



改修前の屋根の様子



改修後の北城路工具博物館⑭



改修前の様子。東道路側の軒下部分が広がられている

図7 建物外観

改修内容：権氏によると、ほぼ軸組のみの状態まで解体し、相当数の柱を追加しながら架構を組み直した。ほぼ全てがDIY的な作業で進められ、そのプロセスで、西側道路敷設に伴う外壁および柱位置の変更の様子などを想像することができたという。東側道路面では軒下増築にともなって大半の柱が撤去されていたらしく、新たに柱が追加された。左官による壁面や建具などは全てが新設であり、博物館として活用するための床の新設なども行われている。



1階内部の様子 2階内部の様子。天井の紙は断熱のために仮設置されている

図8 建物内観

梁には棟札が取り付けられていたらしく、発見当時は、御幣の紙などが付いたままだったようである。棟札には上棟日（昭和十一年九月）のほか、工事請負人、大工、依頼人の名前などが記載されており、日本統治時代の地図と合わせて、同名の米店があったことが確認されているという。



図9（左：2階小屋組。右：棟札）

用途：北城路工具通りに工具や機械を扱う店舗が集積していた時代を伝えるための博物館である。1 階では、壁、テーブル上、引き出しにたくさんの工具が分類展示されている。床面の溝を大きな歯車を蓋にしたり、小さな窪みを工業部品の廃材で埋めたりもしている。2 階は資料の保管のほか、多目的に活用可能なスペースとして確保されており、屋外テラスを有する。



壁面に並べられた工具類



中二階的な床は展示のために新設したもの



床の穴を埋める鉄板やナットなど



脱穀機の設置場所 粃殻排出用の溝と合わせて残された

図 10 展示の様子

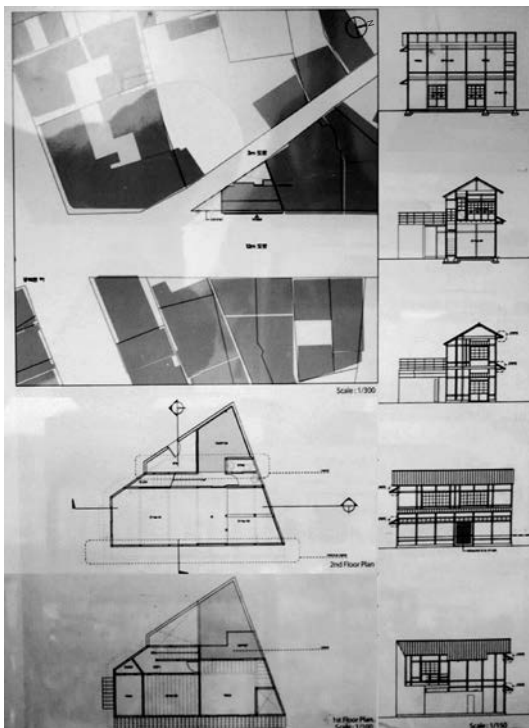


図 11 改修計画図

建築概要 用途：米屋の倉庫／変更後用途：展示場／建築面積：46.6 m²／延床面積：71.9 m²／階数：2 階建

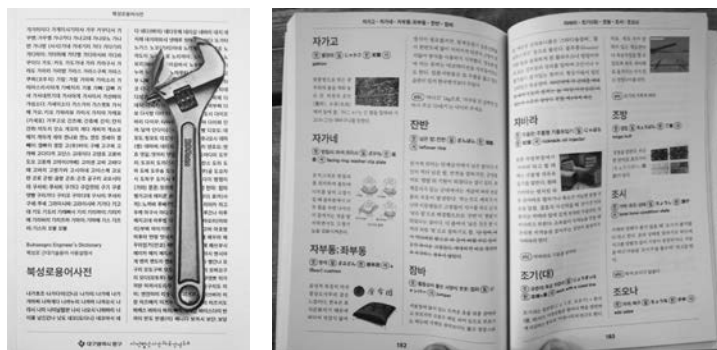
住所：中区太平路 2 街 19／地域地区：中心商業・防火地域／開館：2013 年 5 月

開館時間：火～土（祝日除く）10 時から 12 時および 13 時から 17 時

北城路工具辞典

北城路工具博物館の改修作業を通し、権氏は、現在でも建築工事にまつわる作業や用いる工具などの名称に、多くの日本語が用いられていることに触れることとなった。そこで、権氏を中心にまとめられたのが北城路工具辞典である。

名称、意味、日本語表記、英語表記に、簡単な解説文が続く。多くの用語には写真や図版が用意されている。ほとんどの用語は日本での使い方と変わらないが、例えば「かっぱ」が、人間が用いる雨合羽ではなく現場に設置される雨よけのことを指したり、「のこぎりやね」が「のこやね」と簡略化される場合があるなど、興味深い違いも散見される（「かっぱ」が、荷物や駕籠などの雨よけのことを指すことが日本でもあったようである）。



※写真キャプションにある○印の数字は、p 10 のマップでのプロットに用いている。

図 12 北城路工具辞典（左：表紙 右：内部ページ）

4 路地：チンコルモク

元城郭内の南寄りに、達城徐（タルソン・ソ）氏一族の豪邸が並んでいた路地がある。日本式家屋、中国式建物、韓屋など建築のスタイルは様々である。一部は改修されて飲食店などとして活用されており、散策ルートにもなっている。

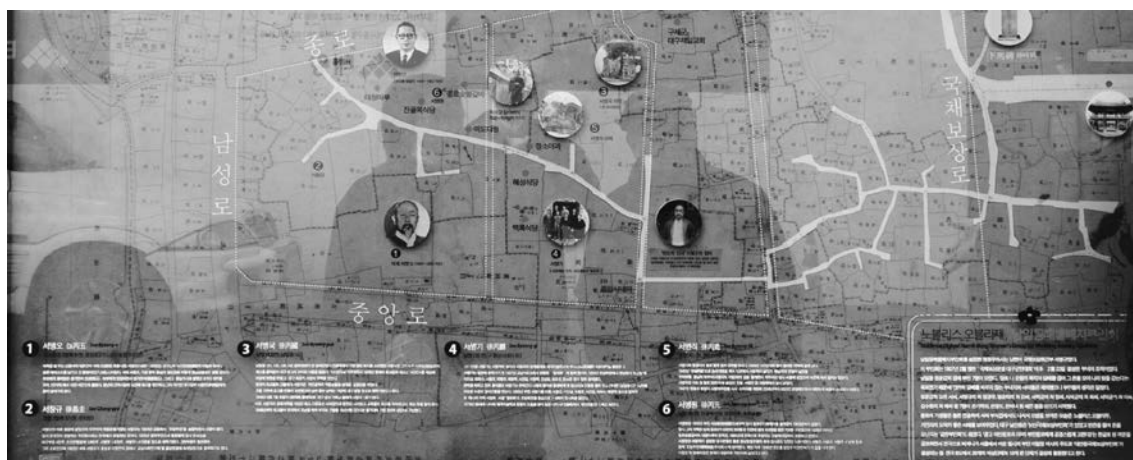


図 13 チンコルモク案内図（右方向が北）



中華協会（徐丙國邸）中国人の設計施工。案内図③⑮



鄭小兒科医院（徐丙直邸）洋風建築。前頁案内図⑤⑯



徐丙元邸平面図。チンコルモク食堂は中央。前頁案内図⑥⑱



チンコルモク食堂入口



チンコルモク食堂内部



南から敷地内の3棟を見る（現地の案内板）

図 14 チンコルモクの建物

5 大邸を読む会

日本文学を専門とする嶺南大学崔範洵（チェ・ボムスン）教授が中心となっ
てはじめた、大邸についての勉強会である。植民地時代を中心とした近代にお
ける大邸の地域の成り立ちについて、広い視点で理解を深めることを目指して
いる。本調査で案内役を務めた権氏も中心的なメンバーの一人であり、氏が進
めるリノベーションによるまちづくりにおいて基調としている既存の様子から
過去を読み解く態度は、この会のスタンスとも通じているといえる。勉強会の
会場は、嶺南大学にはじまり、北城路工具博物館などを経て、最近では大邸ハ
ル（上述した香村洞の事例）がその役割をになう。大邸ハルの代表を務める朴



図 15 まち碩学講
座のちらし

承柱（パク・スンジュ）博士が主導しながら、幅広い視点で大邱に詳しいゲストを招いて行う「まち碩学講座」なども行われている。

6 大邱におけるまちづくり

リノベーションの対象となっている建物の多くは、必ずしも文化財として保存が求められるグレードのものではない。また韓国の近代史に対する歴史的観点から見ても、通常保存対象にはならないものである。またこれらは、時代が重層して町並みが形成される中で、日常的な暮らしの舞台となってきた建物である。日本式家屋に新しい外壁をかぶせ、元の姿を消すという看板建築化は、時代毎に異なる動機で進められてきた。日本統治時代には日本と同様、防火や町並みの修景など近代化に伴うものだったのに対し、戦後まもなくは、日帝残滓清算運動の一環として日本式家屋を壊すことも多くあり、また外壁で化粧して中身を隠すという看板建築化が行われた。一方、1960年代からは商業的な動機で進められた。すなわち、イデオロギー的、政治的、経済的動機と、時代状況に応じて、日本式家屋は姿を消していった。ほとんどの大都市では日本式家屋自体が壊されたが、大邱の場合、なぜかその本体は残っているケースが多い。このような重層的な痕跡こそが、大邱の歴史的特徴だと見抜き、客観的かつ総括的な観点に立って、まちづくりに取り組んでいるのが権氏である。

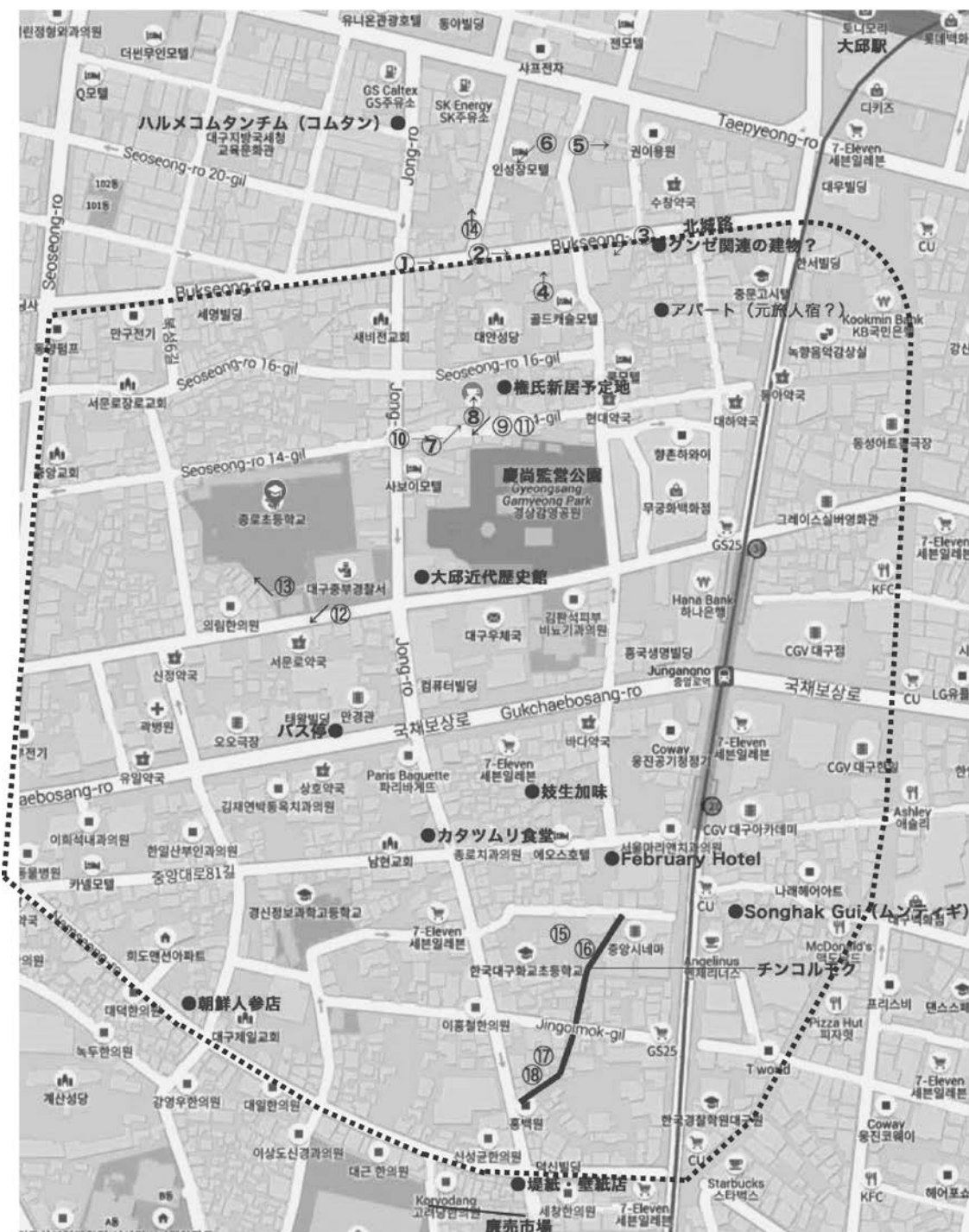
今日に至るまでの変遷を解説しながら、丁寧にリノベーションを進めていることが、ここでの特徴となっている。まちに刻み込まれた人々の思いや地域特有の近代化の過程を、まちづくりの活動が浮かび上がらせている。権氏は、2001年より、まちなかにまつわる記憶を掘り起こす活動を実施しており、2007年には500ページを超える地域史誌としてまとめた。このように、古地図と口コミ調査に基づいた研究を積み重ねてくることで、重層的な時代を俯瞰してみれる視点をもつことができたと考えられる。また、まちづくり活動に加え、北城路工具辞典の出版や大邱を読む会での活動など、いくつかの活動が有機的に関係を持つことで、当時の暮らしのようすが蘇る。



権上九氏



視察のようす（壁紙屋にて）



今回の視察エリア

- 城壁跡
- ①写真撮影位置
- 報告内では触れていない視察先

3) 昌原(チャンウォン)市の都市構造の形成と社会遺産を活かすまちづくり

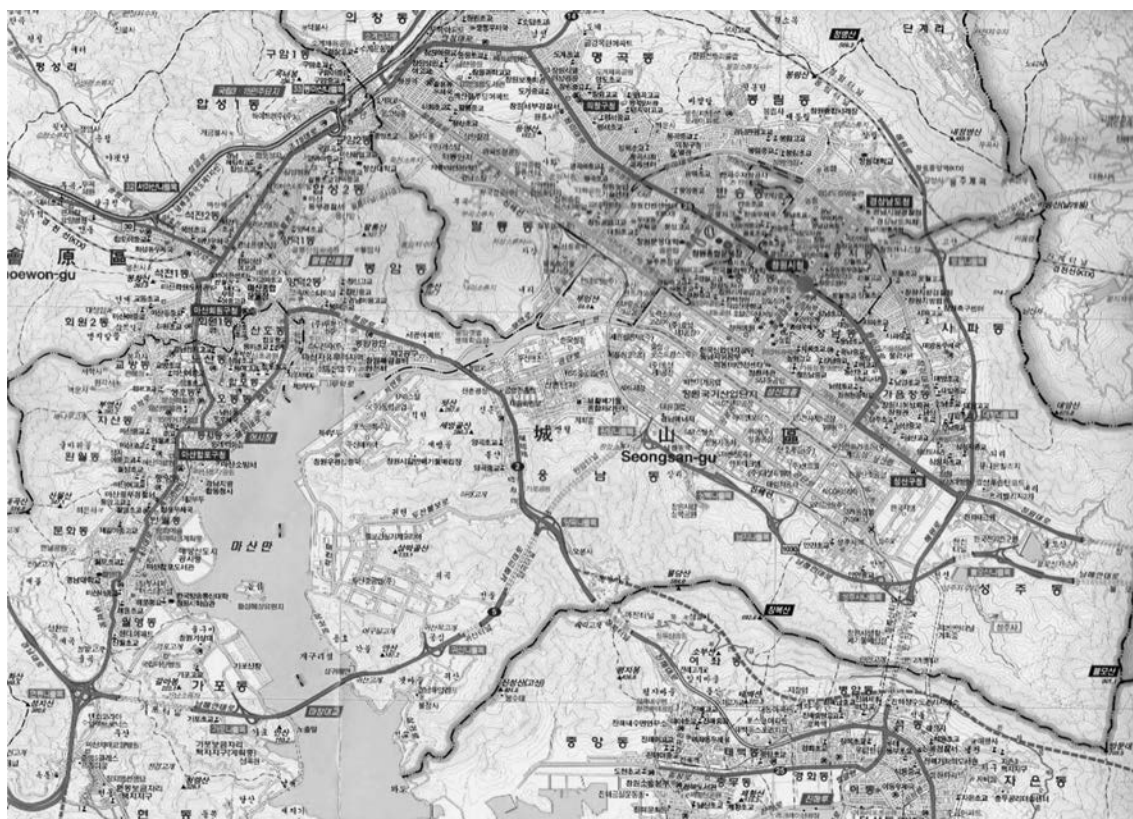


図1 昌原市行政地図 左 旧馬山市 上部 旧昌原市 右下 旧鎮海市 1/65,000 より

1 韓国 慶尚南道 昌原市の成り立ち

昌原市は韓国慶尚南道の道庁所在地であるが、1980年に市政が敷かれた旧昌原市とそれ以前の母体である旧馬山市および南隣の旧鎮海市が2010年に合併してできた都市である。人口は105万(2015)。偶然にも三つの都市の市街地はすべて20世紀の近代史の局面において創られた都市核から発展形成された計画的新都市である。昌原(城山区/義昌区)は70年代の工業拠点、馬山(馬山合浦区/馬山会原区)は19世紀末の開港に際し、古い港町にできた開港地の外国人租界がかつて置かれ、鎮海(鎮海区)は20世紀初め日露戦争後の日本海軍の軍港都市として建設された都市であった。

2 (旧) 昌原市の形成

(旧)昌原市は歴史的には15世紀に昌原都護府として栄えた。さびれていたが、1970年代、朴政権により、この地で新都市づくりが始まった。1974年馬山市に編入された農村部の一帯で、大規模機械工業団地としての都市開発が起工され、79年には昌原新都市計画が策定され、韓国初の本格的な新都市建設が始まる。オーストラリアのキャンベラをモデルにしたと説明されるが、都市計画図を比較すると、軸と環状線と三角構造を持つキャンベラとの共通性はなく、インドの新都市シャンディガールのような地形に沿ったグリッドプランである。モジュールは60m×100m。北朝鮮から遠く南部にある山に囲まれた、相対的に安全な地域であり、この時期の韓国の開発に共通した滑走路への転用可能な広幅員

道路をもち、この時代の都市計画の軍事的背景が反映されている。

1983年に慶尚南道の道庁が釜山からここに移転され、以後、道の行政機関が90年代までに移転される。北側にKTX 慶全線の昌原中央駅が立地し、道庁を核とするグリッドプランに土地利用が比較的によく制御され、中低層建築や公共施設と緑地の多い計画都市であるが、一方で高層の商業地区はおおいに賑わっている。人口=51.1万、(城山区 24.7万、義昌区 25.4万 2008)。



図2 オーストラリアの新首都キャンベラの都市計画 1911 グリフィン (国際コンペ)
議会を中心とする三角軸と同心円構造

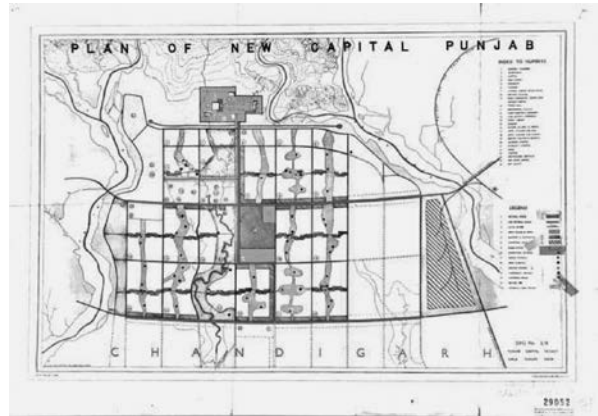


図4 シャンディガール計画図 1950 (ル・コルビジェ設計) ノンスケール



図3 旧昌原市 市街図 1/25,000 より

3 (旧) 馬山 (マサン) 市の形成とまちづくり

(旧) 馬山市のある湾は、歴史的に良港であり、元寇の拠点となったこともある。近代に入り、対馬

海峡を望む深い入り江のこの地は日露の覇権争いの舞台となる。1899年馬山浦事件を経て、馬山浦の南方の沿岸が、開港地となる。当初日英米仏独露の租界が計画されるが、日露戦争を経て日本の租界建設が確定し、1905年から開港地・新馬山の建設が始まる（図5）。新馬山は山から海へと流れる既存の川（桜並木）を軸にしたグリッド状計画である。その南側に平行した道路は海側には税関と棧橋が突出し、山側にはかつての日本領事館のちに馬山府庁が、その背後の英国領事館予定地には馬山府長官の官舎が建ち、隣接してロシア領事館があった。馬山府庁跡には現在慶南大学校の施設が建つ。伊藤博文統監と李朝・大韓帝国最後の皇帝、純宗が軍艦香取から上陸し、この領事館まで行進したという。川に平行して北側の軸の山側突き当たりには、1909年馬山神社が建てられていた。現在その石段を上がると馬山第一高等女学校が立地している。この開港地には終戦まで6000人の日本人が住んだ。当時馬山浦の朝鮮人は6万人とされる。開港地は京町・桜町など市街地として大変繁栄し、春には桜が咲き乱れる美しい街であったらしく、河口付近にあった和風木造3階建ての料亭「望月楼」は多くの日本人芸妓を擁し、花見や歌舞音曲の華麗な賑わいの伝説が残っている。新馬山・開港地の北方には馬山駅が1905年に創られ、郵便局・警察署などが立地し、馬山の中心市街地となった。日本家屋はわずかに残るのみだが、当時の地名や造園、道路パターンなどが残っている。重要建築物で残るのは煉瓦造の旧憲兵隊本部であり（図6）、現在修復中で韓国の登録文化財に指定されている。馬山地区では文化財指定された近代建築物はこの一棟のみである。ここでは日本時代の骨格を活用しつつ発展させながら、まちづくりが進んでいる。南にあった海雲・月影地区の元日本陸軍重砲兵大隊基地跡は素晴らしい緑地が残っていたのだそうだが、高層住宅群の団地造成が近年になされ、地形の痕跡が一掃された結果、市民に悔やまれているという。馬山浦と、新馬山は解放前1930年には南北に連担していなかったが、1937年の鳥瞰図で見ると、これらはスプロールでつながり、1945年には完全に連担し（図8）、現在は北側の谷間にも延びて旧昌原の新都市へと連担し、また湾に沿って東へも市街地は延びた。馬山浦地区の中心部には海辺から登るように伸びるリニアな海産物市場などの活力ある魅力的な市街地がある。一方、湾の沿岸部のまちづくりでは次々に埋め立てが繰り返され、緑地や公園の不足が嘆かれている。ことに臨海公園が求められ、1960年李承晩大統領の退陣につながる馬山事件の舞台となった埠頭が、公園の予定地と



図5 馬山大橋から馬山市を望む



図6 馬山市に残る旧日本軍憲兵隊本部

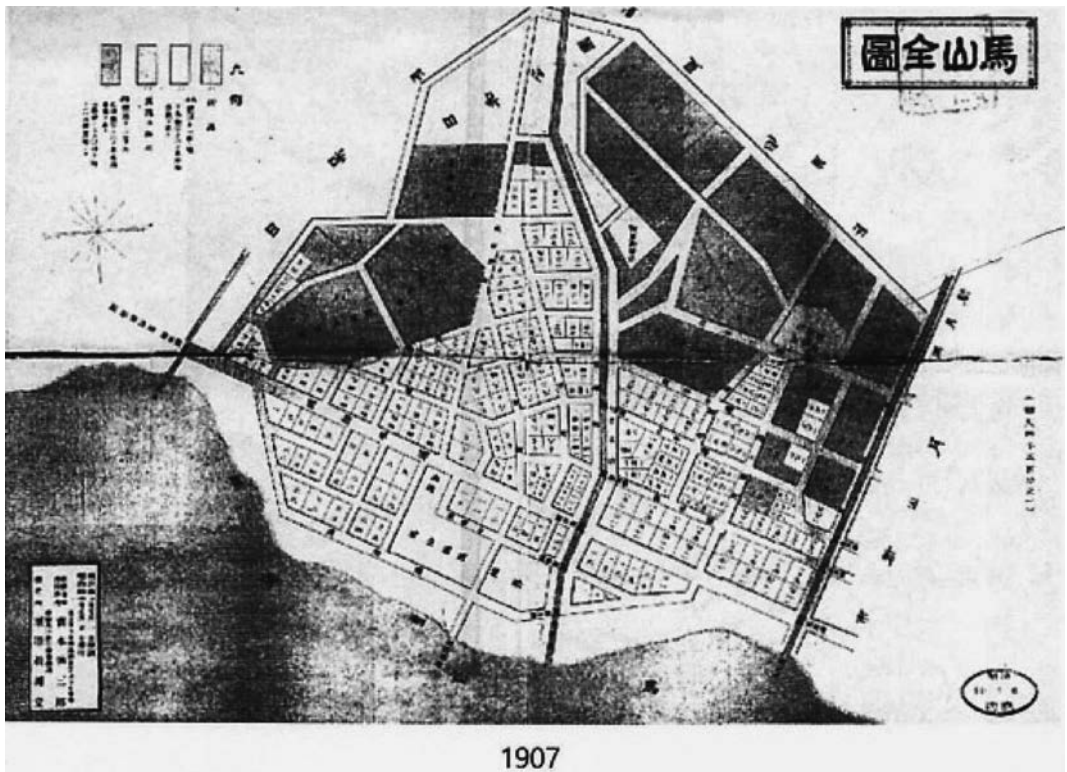
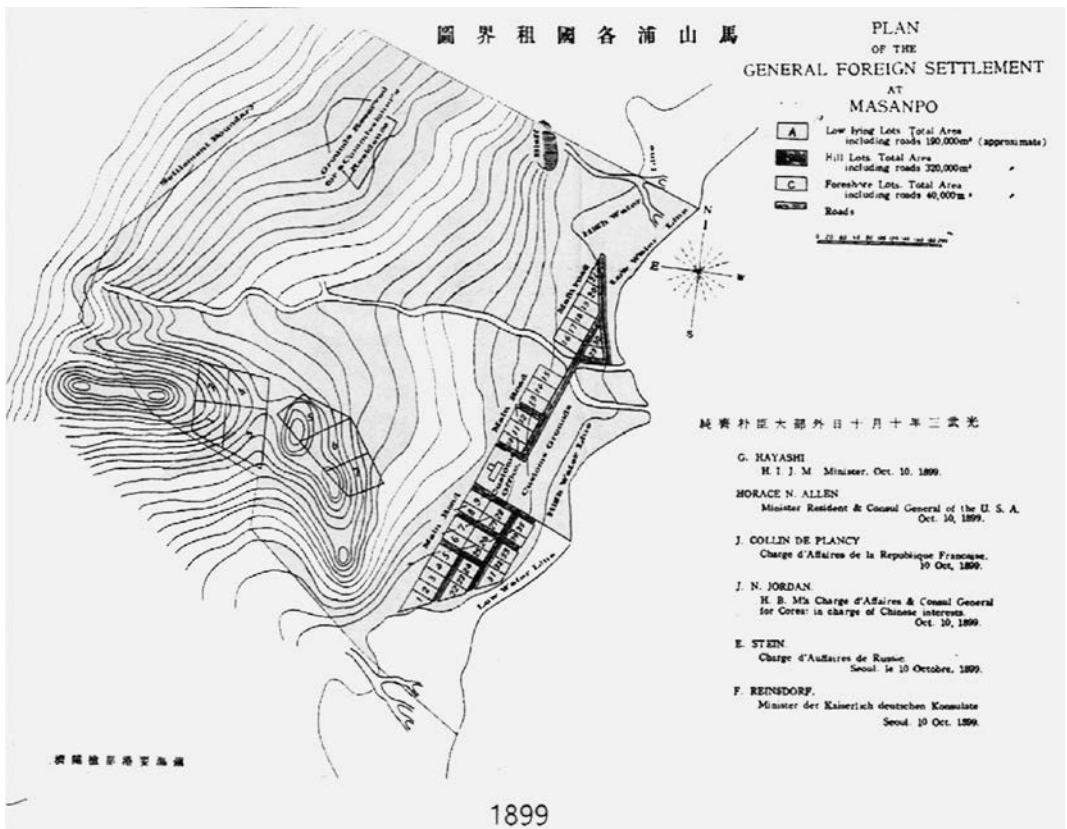
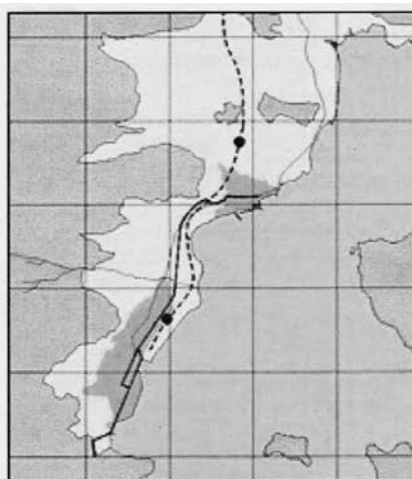


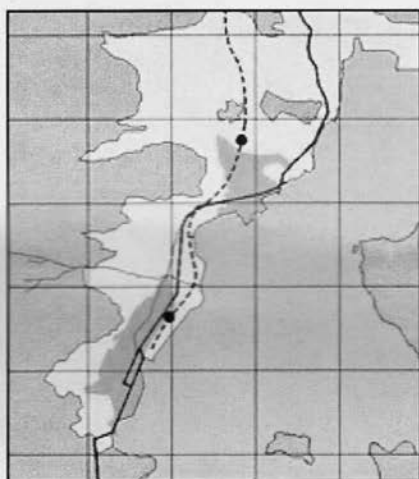
図7 上 1899年馬山浦 租界の各国分配図 日英仏独露の関係者名
下 1907年 日本による新馬山開港地租界の計画図 許博士資料より



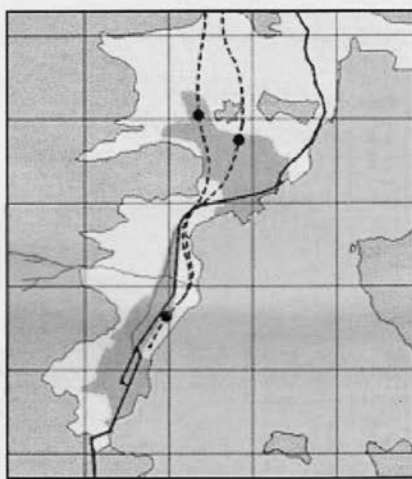
1899 年



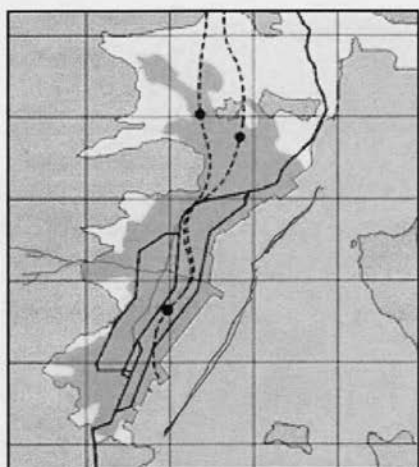
1910 年



1920 年



1930 年



1945 年



凡例

図 8 許正道博士による馬山の発展形成過程図 1899～1945

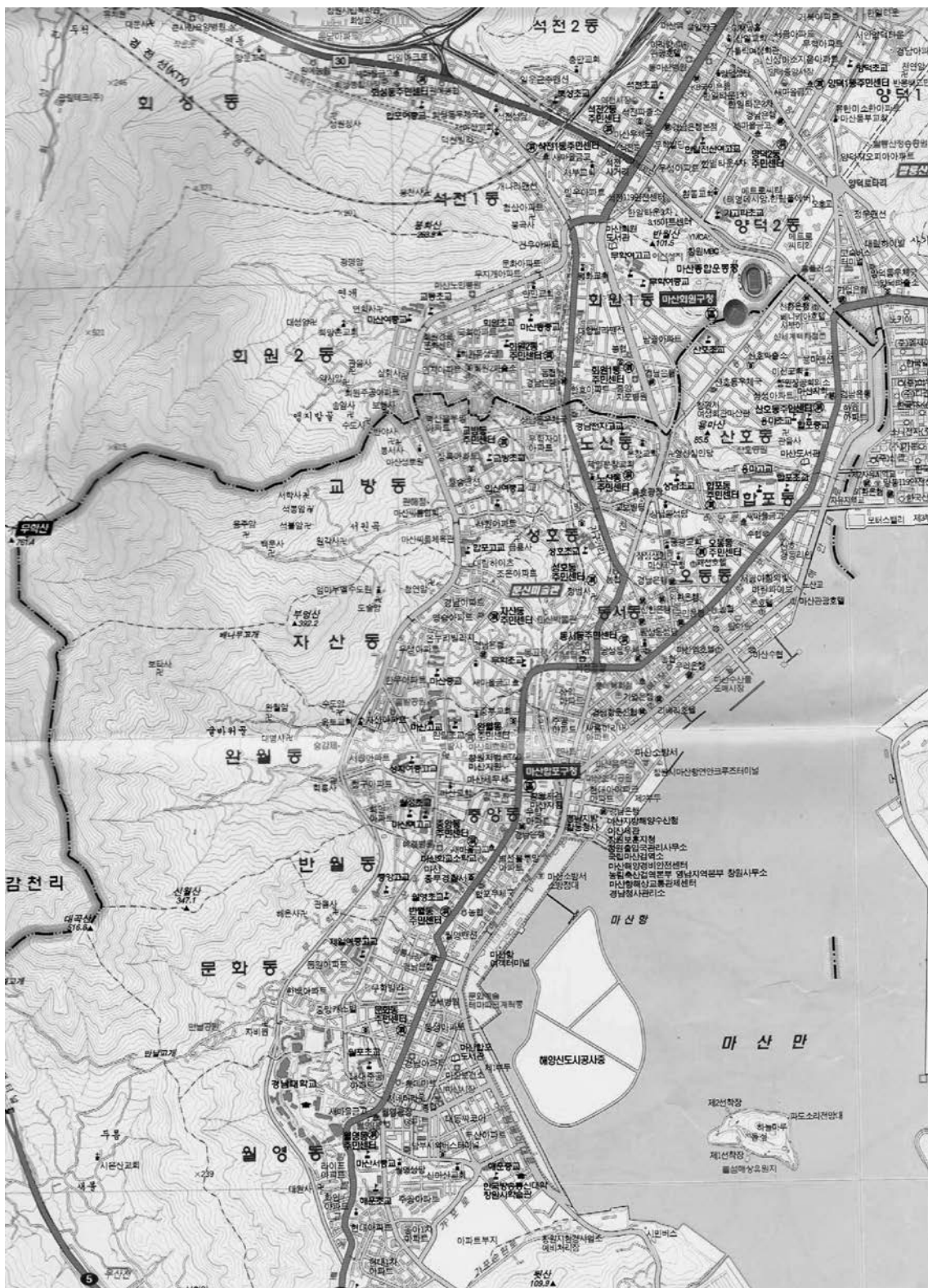


図9 現代の馬山市 2015年 馬山市行政地図 市街地主要部 1/25,000 から



櫻町



櫻町



京町

図 10 1920 年代の新馬山の町並み（許博士）

して整備中であり、初の市街地の親水臨港公園として期待されている。昌原と馬山を結ぶ湾口のベイブリッジ馬山大橋からは、湾に沿って建ち並ぶ高層建築物の景観が眺められる。（図 5）

人口＝馬山合浦区 18.3 万／馬山会原区 22.4 万＝40.8 万。

人口＝馬山合浦区 18.3 万／馬山会原区

4（旧）鎮海（チネ）市の形成とまちづくり

馬山市や昌原市の立地する鎮海湾の湾口東に位置する鎮海は、伽耶時代から日朝のさまざまな交流や摩擦の舞台となる。15 世紀には倭館が置かれ、日本人も多く居留した。16 世紀の文禄慶長の役ではここから陶工が日本に連行された。

1904 年日露開戦に際しては、一帯が日本海軍の拠点となり、1910 年山に囲まれた平地に鎮海軍港の

建設が始まる。ここにある 390 戸に居住していた朝鮮人 2000 人は、2.5 km 離れた地区慶和洞に強制移住させられた。

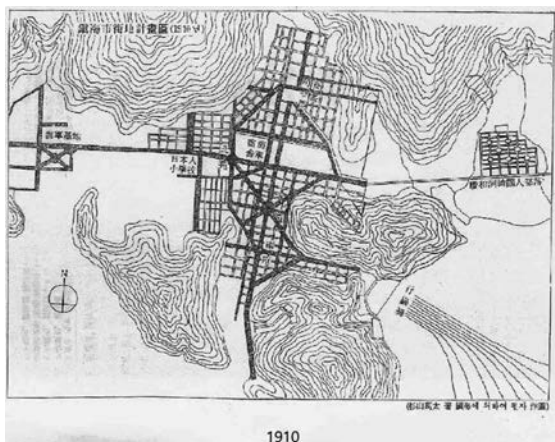
鎮海の都市計画は、馬山のグリッドプラントは異なり、複数のロータリーや結節点をグリッドと斜め軸で結ぶ都市計画である。中心市街地はほぼ 800 m 角の正方形に収まり、真ん中に中央ロータリー（中辻）がある。プランが選ばれた背景には、この地に信仰の対象となる多くの巨木（ベンナム）が存在し、いくつかの巨木の位置をロータリーに設定して基準として残した結果であるという。三つの大きなロータリーが造られ、現在も残っているが、巨木は枯れて残っていない。だが 1920 年代の鳥瞰図（許正道博士論文）では、大きな木が中辻ロータリー中央に植わっているのが見える。伝承では中央の巨木は 1950 年代まで存在し、枯れたとき樹齢は 1000 年を超えていたという。（図 14）

図 11、1910 年の都市計画を詳しく見ると、平地中央に中辻があり、南側の小さな湾から北側の鉄道駅までまっすぐに伸びた南北軸と鉄道駅から西側の軍港へ向かう東西軸によって計画は構成されていた。南側の小さな湾は 1919 年三・一運動後長谷川総督解任後に着任した齋藤實朝鮮総督の名を冠して齋藤湾とよばれ、現在もいわれは知らぬままCHEDMAN という地名が残る。東西軸沿いに北辻、南北軸沿いに南辻が計画された。東西軸の西側は軍港に向かう。現在そのまま韓国海軍の軍港があり、ここで市街地の発展は停まっている。一方東側は湾に沿って近年の 30 年間に、数キロ新市街地が延びて発展している。南北軸では日本時代には鎮海駅北方の開発は停まっていたが、現在では旧市街とほぼ同規模の新市街地が旧市街地北方に延び、100 年前の都市計画が達成された形となっている。

旧市街地の中央東側には、現在、鎮海塔山とよばれている丘があり、モノレールのケーブルカーで登

攀でき、鎮海塔から旧市街地が眺望できる。この位置にはかつて日露戦捷記念塔が 1929 年に建てられていた。この山は中辻ロータリーと東西軸に対峙している。

ここから見ると鎮海（軍港市街地）の都市計画が巨木ロータリーに加えて、建築物を含んだ景観計画をとまっていたことがわかる。中辻ロータリーから百メートルあまり離れた左右を



1910



1916

図 11 鎮海の当初の都市計画 1910 年とその実現 1916 年 許博士資料より



図 12 桜の名所 近現代史の残る都市としての鎮海の観光パンフレット

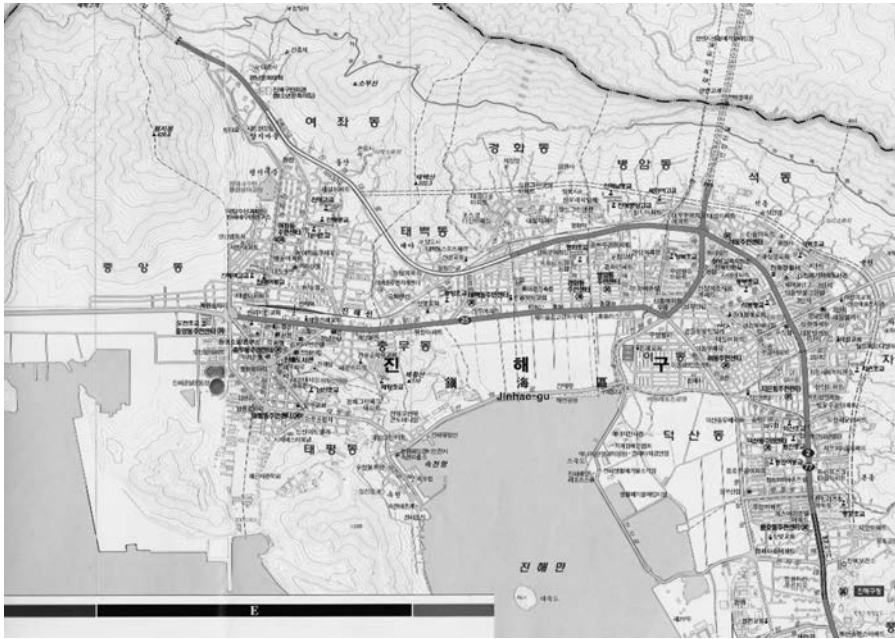


図13 現在の鎮海区の地図 2015年 1/25,000より



図14 中辻にあった巨木 1920年 昌原市立鎮海博物館展示より



図15 八角亭。東西の交差点に設置された塔状ランドスケープ建築 元医院 セスヤン会館

見ると、左には東洋的な塔を持つ3階建ての八角亭(図15)、右には西洋的な塔を持つ病院建築があるなどの景観計画が行われている。よくデザインされた郵便局(図16)や駅舎も街路のアイストップに計画され、街路沿道には日本家屋の連続建て町家(長屋・図17)が計画され、多くの街路に桜並木が計画された。

今日も桜の名所や観光地となっているこの市街地は、大げさに言えば ナポレオン三世統治下でパリの都市計画を行ったオスマンの計画を想起させる。すなわちロータリーと放射街路からなり、建築のコントロールを含む景観的都市計画の施された都市であった。図2のキャンペラとも同時代で、規模は異なるが同時代の計画として通じる、先端的都市計画であったと言える。

日本人は最盛期には2~3万人がここに居住したという。鎮海市街地は昌原市の三つの市街地の中で



図 16 鎮海の郵便局。現在文化財として修復中



図 17 鎮海の沿道建築 木造長屋建て町家

は最も小さいが、よくまとまった市街地である。

この連担市街地のさらに東方の湾は、現在釜山港の一部になっているが、かつて元寇の基地でもあり、秀吉の侵略と李舜臣將軍の反撃の活躍の舞台でもあった。秀吉入寇時に小西行長が帯同した、イスパニア神父グレゴリオ・デ・セスペデス（1511 マドリード生～1611 小倉没）は、朝鮮にわたった初のキリスト教伝道師であり、記念碑がある。鎮海では初期の軍港市街地を核として、これらの骨格と諸要素を近代遺産として保全しつつ、まちづくりが進んでいる。

人口＝鎮海区 15.1 万 2008 年。

本稿の根拠となる資料は、現地ヒアリング・観察・昌原市行政地図 1/65,000 による。またいくつかの基本事項は複数のウィキペディアの参照による。

もっとも重要な情報と主要な論点は、許正道博士の現地案内・現地討論と博士の論文「二つの都市に



図 18 中辻にあった巨木広場の左右に八角亭や病院のタワー 郵便局や連続する都市建築が見える 1930 年か 昌原市立鎮海博物館展示より



図 19 鎮海地区

残る日本の痕跡＝馬山・鎮海」(原文韓国語)によっている。

4) まとめ

本調査研究では、すでに大邱・昌原の2都市について、十分な研究をはたして来られた権氏、許博士の案内と資料提供をうけて、短時間で実り豊かな資料収集を行うことができた。

両都市はまったく異なる古代中世近世の歴史的背景の元に形成され、近代化の努力と対応に加え、日本統治下の旧朝鮮／大韓帝国／大韓民国がうけた近現代史における苦難をともなう都市の近代化過程を経て、さらに南北分断で困難な独立後の都市形成を行い、続いて朝鮮戦争(韓国戦争)の国土破壊と軍事的緊張のもとで都市づくりをすすめて、今日の比較的平和な時代によりやく繁栄をもたらすことができている。まちづくりと社会遺産を活かした都市再生の立場から、これらの2都市または1大都市と3地区をみると、まったく異なる変化発展の姿を見ることができ、多くの示唆に富む教訓と知見をうることができる。

大邱は古代および王朝時代から韓国南東部の主要な拠点都市であり、早くから近代化や西洋文化の流入の始まった都市でもあった。朝鮮戦争の直接の戦場にならなかったことから、大邱は70年代以降の経済/技術発展の先端都市の部分と王朝時代の城市の骨格に加え、20世紀前半の初期近代都市の風貌が残存する都市でもある。日本統治時代の近代的町並みは、不当な植民地支配を記憶するものではあるが、同時に多くの市民の日常生活と都市文化享受の場でもあった。大邱市のまちづくりはこれらの痕跡をむしろ積極的に社会遺産として残し活用し、連続的な現代史の舞台としてまちをハイブリッドに活かそうとしている点が成功しており、おおいに示唆に富んでいる。

昌原市中心部は70年代の内陸部先端工業都市として、旧馬山北方の軍事的に安全な内陸農村部を開発して創られた理想都市としての新都市であり、モジュールが適切な大きなグリッドプランが描かれ、段階的な開発が行われた。のちにKTXの路線との結合や駅の新設などが行われ、80年代には慶尚南道の行政中心も移転して、行政とハイテク工業の中心都市となった。50年後の今日では商業娯楽地区や

文化施設の立地も豊かな都市として成熟しており、新都市の計画として成功したといえ、おおいに教訓に満ちている。

旧馬山地区では伝統的な港町が19世紀末欧米列強の開港圧力によって少し離れた海辺が開港地となり、各国租界が計画され、やがて日露戦争を経て日本中心の開港都市新馬山となった。新馬山の計画はやや中心性をおびたグリッドプランだが、やがて旧馬山/新馬山は連担し、一つの都市として発展する。戦後（解放後）の課題は世界の港湾都市の共通課題でもある、交通の円滑化、埋め立て、市民海浜公園の実現である。ここでは近代の都市骨格とノード node（公園・広場・駅・公共用地・緑地・海浜との接点）やパス path（並木道・バス道・河川緑地）を活かしながら、歴史性豊かな活気あるまちづくりがすすめられようとしている。

馬山の東南にある鎮海地区は、日露戦争に際して創られた軍港都市である。鎮海には独特な中心性を持つ放射状都市計画がなされた。三方にある湾状の港湾と都市の発展方向、鉄道敷設などをにらんだ野心的な都市計画である。山など周囲の自然地形を採り入れ、さらに敷地に多くあった巨木を残し、これらをロータリーにするという独特な都市デザインが計画された。ことにロータリーの周囲には特徴ある建築が配置され、並木道沿いには沿道建築が設計され、桜の並木道が計画されるなど都市景観の形成におおいに腐心した計画デザインがなされた。

今日鎮海は東側の鎮海湾に沿った発展方向に新市街地を発展させているが、旧鎮海軍港地区は歴史文化拠点 レクリエーション拠点、桜の景勝地としてその美しい姿を発展させるまちづくりが行われている。

韓国南東部都市において、これら特徴あるまちづくりがすすめられ、歴史性や社会遺産を反映してさまざまなまちづくりの方向性に発展している姿を詳しく見ることができた。これらがどちらかというところ、地方自治体や市民団体、大学文化機関の協力で支えられ、行われていることもおおいに興味深い。

本稿執筆にあたって、この調査に全面協力し、資料をご提供いただいた大邱市の「社団法人 時間と空間研究所」理事・権上九（グォン・サング）氏、昌原市の昌原大学 兼任教授・許正道（ホ・ジョンド）博士をはじめ、大邱市昌原市でまちづくりを推進しておられる方々に、あらためて、深甚なる謝意を表したい。

（しげむら つとむ 客員研究員 神奈大学工学研究所客員教授）

（そがべ まさし 神奈川大学工学部教授）

（ちょん いるじ 客員研究員 熊本県立大学環境共生学部准教授）